保育の現場から

イチョウの葉っぱの枕やさん

佐藤寛子

幼稚園の秋。園庭の高台（私たちの園では、「おやま」と呼んでいます）のイチョウの大木は、今年もその葉をきれいに黄色く染め、幼稚園に秋が訪れたことを伝えてくれます。イチョウの木がその存在を最も主張するのがこの季節。

そんな中、この木に守られて私たちの暮らしがあることを、改めて感じる出来事がありました。

おやまに出かけよう

ここ数日、仲良しの友達とうまく気持ちが合わず、浮かない表情で過ごしていたY子を、私は「おやま」に誘うことにしました。

保育室で所在なげに過ごすより、広い「おやま」に出かけ、体を動かすことで、気持ちを切り替えることができるのではないかと考えたからです。

Y子は初め、私の誘いにいまひとつ乗り気ではない様子でしたが、たまたま居合わせたI子とR夫の「行こう！　行こう！」という勢いに押されて、一緒に外に飛び出しました。ところが、その日はどんよりした曇り空。外に出てみて、「いまひとつだな」と私は

がっかりしました。けれど、I子とR夫はすでに「おやま」に続く階段から、「Yちゃん、先生、早くー」と叫んでいます。Y子とその後を追いかけ、みんなで一気に「おやま」に駆け上がりました。

「おやま」に着いた瞬間、目に飛び込んできた風景に、私は思わず息をのみました。横にいた子どもたちも、一瞬足を止め、「すごーい！」「きれーい！」と叫びました。

「おやま」は一面黄色に染まっていました。昨日の風で落ちた葉が地面を覆い、まだ木に残っていた葉が、吹いてきた風で空を舞っています。曇りとは思えない明るさ。園舎や下の園庭とはまるで別世界でした。

「おやま」には、すでに五歳児たちがいて、くま手やほうきを使って一か所にせっせと落ち葉を集めていました。聞くと、「おやま」にある「土管の山」のふもとに落ち葉のベッドを作っているようで、「年中組も土管の山のてっぺんからダイビングしていいよ！」と言ってくれました。

「やってみよう！」と私たちは土管の山に登り、てっぺんから走り降りてベッドに飛び込みました。あおむけになってベッドに横になると、何だかおかしくなって、みんなでケタケタ大笑い。「草のにおいがするね」とY子。落ち葉のベッドのふわふわした暖かさと、Y子の久しぶりの笑顔に、私は幸せな気持ちになりました。

枕作り

何度かダイビングに挑戦したあと、「じゃ、私たちは枕、作ってみる？」と私が言うと、「枕？　どうやって作るの？」と興味をもった様子の子どもたち。急いで保育室にビニール袋と粘着テープを取りに行きました。ビニール袋にイチョウの落ち葉を詰めて、粘着テープで留めるシンプルな枕。何年か前にも楽しんだことがありました。

子どもたちは、すぐにイメージがもてたようで、ビニール袋に適当に落ち葉を詰め始めました。粘着テープで封をし、一度地面に置いて寝心地を試してから、もっと葉っぱを詰めてみたり、逆に減らしてみたりしています。中に詰めるイチョウの葉っぱの量の違いで、柔らかさに微妙な違いができるのです。

「草のにおいがするのがいいねー」などと子どもたちが言っているのも聞こえてきました。寝転んだ時、頭の重みで枕から空気が漏れ、すーっという音と一緒に草の香りが漂ってきます。

子どもたちの様子から、ビニール袋の口は、何度も開け閉めができ、なおかつ、密封しない留め方がよいことがわかりました。

出来上がった枕で空を見ながら寝転んでみたり、高く投げ上げて両手でキャッチしてみたり、友達にパスしてみたり……。思いのほか楽しめる手作り枕を子どもたちも気に入ったようで、自分の作ったものに名前を書いてほしいと言ってきました。せっかくなら、枕カバーを付けて、自分のだということがわかるようにするのはどうかと思い、私は不織布を用意し、子どもたちの枕一つひとつに巻き付けました。

I子、R夫は枕カバーに思い思いに好きな絵を描き込みましたが、Y子は、この時になると再び表情を曇らせ、私に描いてほしいと言ってきました。

「自分の好きな絵を描いていい」「自分だけの枕」。友達とのかかわりの中で、自分とは何なのか？　自分は何が好きなのか？　何をしたいのか？　と、「自分」といや応なく向き合うことが増え、戸惑っているY子の思いが伝わってきました。

Y子の枕カバーの絵は一緒に描くことにしました。

「その枕、僕にください」

その日の降園時、手作りの枕を両手で抱きかかえて座っていたY子に、U夫が枕を自分に譲ってほしいと

せがみました。

「先生と私で作ったから…」と断るY子。「U君も、明日一緒に作ろうよ」と私も声をかけました。それでも、U夫はかなり執拗にY子にお願いし、しまいにはY子の前にしゃがみ込んで、「おねがい！」と両手を合わせる始末。必死のU夫の様子に「しょうがないなあ」とY子は枕を手渡しました。

渡さなくていいのに……と思いながらも、U夫の必死な様子を見て、私もただ事ではない気がしていました。また、枕を譲ってほしいとせがむU夫に、Y子が躊躇しつつも枕を手渡したのは、本当は自分の力でいまの状態から抜け出そうとしている表現のようにも感じ取れました。私の手を借りず、自分で作り上げた枕であったなら、Y子は手渡さなかったかもしれません。

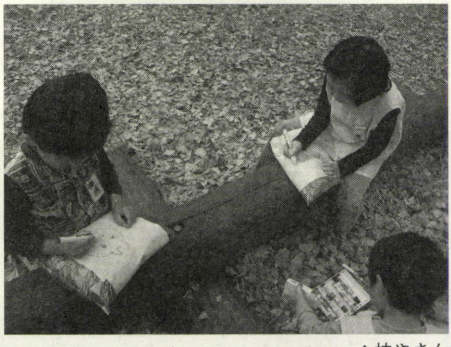
「ありがとう！」とお礼を言い、U夫はその日、うれしそうに大事に枕を抱えて、家に帰りました。

枕やさんの開店

翌日U夫は、登園するとすぐに「おやまで枕やさんがしたい！」と私に言ってきました。保育室の机や椅子を「おやま」まで運んでいきたいと言うのです。いますぐ取り掛かりたいU夫の気持ちが伝わってきたものの、登園時でまだ全員の子どもたちが来ていない状況だったため、私はなかなか動きだせずにいました。U夫は、学年担当のS先生に頼み、一緒に準備を始めました。私もビニール袋や粘着テープ、カバー用の不織布をS教諭に渡し、好きな絵が描けるようにカラー水性ペンのセットが幾つかあるといいことを伝えました。

少し経って、ほかの子どもたちを誘い「おやま」に行くと、U夫の枕やさんは、すでに大勢のお客さんでにぎわっていました。自分で作れる人には、ビニール袋を手渡し、葉っぱを詰めてもらい、詰め終わった人

には、ビニール袋の口を粘着テープで留めたり、カバーを付けたりする手伝いをしていました。枕カバーに水性ペンで好きな絵を描けるコーナーもありました。自分で作れない人には、絵だけを描くことができるような無地のカバー付きの枕があったり、U夫の得意な電車の絵を描き込んだ完成品も用意されていたりしました。S先生とU夫とで、工夫して遊びを進めていることが伝わってきました。



▲枕やさん

お店をせっせと切り盛りするU夫の様子に刺激を受けて手伝い始める子どもたちもしだいに増えていきました。H夫は、材料が少なくなると保育室に走って取りに行き、補充していました。そして、Y子は、昨日描かなかった枕カバーを描き、自分用の枕を一つ完成させると、年少児に枕カバーを付けてあげたり、水性ペンを手渡して「好きな絵を描いていいんだよ」と声をかけたりしていました。

忙しそうにお店を切り盛りするU夫は、私の姿を見つけると近寄ってきて、「昨日、お母さんが、あの枕でお昼寝したんだ！」と、うれしそうに話してくれました。

葛藤しつつ、いまを前向きに生きる子どもたち

四歳児の秋。子どもたちは園の生活に慣れ、自分の場所として安心して遊び始めるようになります。しかし同時に、Y子のように、自分と友達の思いの違いに気づき、うまく遊べずに戸惑うことが多くなるなど葛藤することも増えてきます。そんな時、友達との関係

を超えた自然とのかかわりの中で、葛藤を乗り越えていくエネルギーを得ることができるのではないかと考え、私はY子を園庭の「おやま」に誘いました。

イチョウの葉の鮮やかな黄色、土の上に幾重にも重なった落ち葉の感触、漂ってくる草の香り。この環境をもたらした大きなイチョウの木の存在。「おやま」の上は生きるエネルギーが静かに満ちていました。Y子が、友達や教師と一緒に落ち葉のベッドに飛び込み、大声で笑い合うことができたのは、この環境があったからだと感じます。

一方、譲ってほしいと必死で頼んだU夫もまた、葛藤のただ中で過ごしていました。

この出来事の数日前、U夫の母親が「U夫が言うことを聞かず、ここのところ親子げんかが絶えない。自分の接し方が悪いのだろうか」と涙ながらに訴えてきたことがありました。傍らで弟と一緒に走り回って遊んでいたU夫が、母親のただならぬ様子に気づかないはずはありません。弟の子育てに大変な母のことを理解しながらも、U夫自身の存在が危うくなることが、家庭の中でも多かったのではないかと想像できます。

草の香りのする柔らかな枕。自分の好きな幼稚園のイチョウの葉っぱが詰まっている枕。「これがあったら、お母さんはゆっくり休めるに違いない」そんなことをU夫は考えたのでしょうか。Y子に必死でお願いし、何が何でも持って帰ろうとした、あの時のU夫の気持ちに改めて気づきました。Y子が譲ってくれたこと、母親が喜んでくれたこと、そうした思いが翌日の枕やさんにつながっていったのだと思います。

悩んだり戸惑ったりしながらも、物や人と豊かにかかわり合って、自分の力で前向きに歩もうとしている子どもたち。イチョウの木に守られながら、そんな子どもたちとの日々の暮らしを、私も一緒に生きようと改めて感じた秋の出来事でした。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）